

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2015年4月30日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第12号

多様性と絆あふれる地域・東九条



ネットワークサロンの周囲を飾る東九条春まつりのノンギ

飾られます。ノンギを立てる習慣は、3年前（2012年）の第1回東九条春まつりから続けられているもので、春の訪れとともに東九条春まつりが近づいたことをお知らせするものになっています。この手作りのノンギは、保育園や児童館の子どもたちからオモニハッキョ（識字学級）に通うハルモニ（おばあさん）たちまでが参加して作成されたもので、一本一本が味わい深いものとなっています。

ノンギの作成には、中高生たちも参加しました。その中の一人の少年は、イラストとともに「多様性と絆あふれる地域・東九条」と書き込みました。大人に言われて書いたものではなく、彼自身の思いと願いから出てきた自然な言葉でした。彼の思いと願いの通り、東九条春まつりは回を重ねるごとに参加者が増え、多様な立場の方が一緒に作り一緒に楽しむものになってきました。少年だった彼も成長し、4月から大学生になり新たな世界に踏み出しています。

（前川 修 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン）

2014年度第3回ボランティア講座

「難民ってどんなひと？」



テュアン・シャンカイさん（左）と船谷哲平さん

2014年10月25日（土）、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンにおいて、2014年度第3回ボランティア講座「難民ってどんなひと？」を開催しました。今回講師にお迎えしたのは立命館大学を中心とする大学生による難民支援・研究団体 PASTEL の2014年度代表を務める船谷哲平さんと、ミャンマー難民2世のテュアン・シャンカイさんです。シャンカイさんからはご自身の生い立ちも含めた日本における難民の

現状を、船谷さんからは PASTEL の活動紹介を、それぞれお話いただきました。

現在、日本国内でも1万人以上の難民の方々が暮らしており、言葉や生活保障をはじめとして、社会生活に様々な困難を抱えています。両親が軍事政権による民主化運動への弾圧を逃れてミャンマーから日本に亡命してきたというシャンカイさんは、難民を対象とした大学推薦制度を利用して大学に入学しましたが、無国籍のため海外留学を諦めざるを得ませんでした。

船谷さんやシャンカイさんが取り組んでいる「Meal for Refugee（難民のための食事）」は、難民の祖国の料理を大学の学生食堂で提供し、その売り上げを難民支援に充てるというプロジェクトです。食べることで難民について知り、手軽に支援につなげることができるというコンセプトで、現在までに全国で20の大学が活動に賛同しています。

難民への公的保障が十分ではない日本では、ひとりひとりの力が難民の生活や心を支える助けになるといいます。そのためにも難民へのマイナスイメージや偏見を取り去り、日本で難民が置かれた状況を理解することが大切とのことでした。



2014年度世界の料理教室

京都市地域・多文化交流ネットワークサロンでは2014年度も〈世界の料理教室〉を4回開催しました。2014年度第1回〈世界の料理教室〉をご紹介した前号（第11号）に続き、今号では第2回、第3回のもようをお届けします。

第2回 中国の家庭料理

2014年9月6日（土）、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンにおいて、2014年度第2回世界の料理教室が開催されました。今回は講師として中国出身で東九条在住の馮愛梅（ヒョウ・アイメイ）さんをお迎えし、中国の家庭料理を学びました。メニューは水餃（スイジオ：水餃子）と香菇油菜（シャングユーツァイ：椎茸と青梗菜の炒め物）の二品です。中国の大連出身の愛梅さんは、結婚して2012年に来日されました。現在は地域で子育て中のお母さんでもあります。調理の合間には大連の写真をを見せていただき、中国での生活や文化についてのお話を伺いました。とても明るい性格の愛梅さん。参加者とも打ち解けて、楽しい時間を過ごすことができました。



馮 愛梅さん（中央）

第3回 韓国家庭料理

続いて12月6日（土）には2014年度第3回世界の料理教室として、韓国の家庭料理を学びました。講師にお迎えしたのは世界の料理教室ではすっかりお馴染みの白榮伊（ペク・ヨンイ）

さん。料理上手な東九条の名物オモニです。テーマは「近所のスーパーで入手可能な材料で作る韓国家庭料理」ということで、日本で手軽に手に入る食材を用いながらも、白さんならではの工夫によって本場の味が再現されました。春雨の炒め物（チャプチュ）にタンポポの葉の和え物、海鮮鍋（チゲ）の三品に、白さん手作りのキムチも添えて、盛りだくさんのメニューです。盛り上げ上手な白さんの楽しいトークで、料理だけでなく、韓国の社会や文化への理解も深まりました。



白 榮伊さん（右から2人目）

2014年度 東九条を知る学習会

心のポケットに宝物を

～民族学級の子どもたちに託す思い～



〈東九条を知る学習会〉での金 慶子さん（中央）

2014年度の「東九条を知る学習会」は、東九条地域の子どもたちが通う、京都市立凌風学園の「コリアみんぞく教室」民族講師、金慶子（キム・キョンジャ）先生にお越しいただきました。2009年より元陶化小学校の民族教室で子どもたちにコリア文化を伝え続けてこられた金先生は、地域の学校が合併して

凌風学園になり、「コリアみんぞく教室」として名前が変わった後も、コリアン・ルーツの子どもたちに文化を伝え続けておられます。

路地であそんだ近所の子どもたち、朝鮮第一初級学校に通う道中、たき火にあたらせてくれたおばちゃん、運動場で遊ぶノルティギ（シーソーのようにして遊ぶ）の板をみんなにくれた工場のおじちゃん、休憩時間に運動場で紙芝居をしてくれたおじちゃん…東九条で生まれた金先生は、子どもの頃の出会いが、社会への恩返しの思いにつながった経験から、民族学級の子どもたちにも、「いい出会いをさせてあげたい!! 心に残る思い出をいっぱい作ってあげたい!!」と感じておられます。それは民族学級以外の子どもたちにとっても同じことです。民族学級のある学校で育った子どもたちが、友だちや民族講師との出会いから、自然に多文化共生を受け入れて、支える気持ちが育ち、それぞれが大人になって共に生きる力になれば、と話してくださいました。

現在、民族学級に通う子どもたちの籍はさまざまです。そんな中で子どもたちは、自分の中の民族を一生懸命つなぐ作業をしています。初めて知った民族名、初めて着る民族衣装、その度に見せる嬉しそうな笑顔ひとつひとつが宝物。その宝物を胸に、自分をしっかり持ちながら育ち、ひとつひとつ問題を解決できる、肝っ玉のすわった子に育ってほしい、と民族教室の子どもたちに託す思いを語られました。

お話の途中で、朝鮮学校のヘイトスピーチ襲撃事件にも触れられました。朝鮮学校の子どもたちだけでなく、子どものころに出会ったノルティギのおじちゃん、紙芝居のおじちゃん、思

いをもったすべての人を踏みにじる許せない行為だと…。判決が出た後も、子どもたちの心、社会には残っていきます。自分たちがどう生きていくかが問われ続ける、と話してくださいました。

民族教室の子どもたち、民族学校の子どもたち、まわりの子どもたち、今を生きる子どもたちすべてが大人になった時、それぞれの立場を大切にしながら、強い力で支え合える未来を想像しながら、今、関わる大人の責任は大きいと感じました。

(宇山 世理子 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン)



2014年度 東九条を知る学習会「心のポケットに宝物を ~民族学級の子どもたちに託す思い~」の講師を務められた金 慶子さんにメッセージを寄せていただきました。

白いパジチョゴリ姿のハルベ(お爺さん)、玄関先に腰掛けコンジルン(豆もやし)のしっぽをとるハンメ(お婆さん)、そのような面影がこの町にはある。在日の歴史が混在する東九条。私はここで生まれ幼少期を過ごした。

思い出深いこの地域に再び戻ってきたのは、陶化小学校民族学級の講師として。朝鮮学校で学んだ私にとって、日本の学校は初めてで未知の世界だった。緊張気味に校門に入る私に、ある子が声をかけてくれた。「先生、名前なに?」「キム・キョンジャです」と答えると、何食わぬ顔で「ああ、民族(民族学級)のソンセンニン(先生)か! アンニョンハシンニカ」とにっこり。あどけない笑顔をみた瞬間、一挙に緊張がほぐれたのを今も鮮明に覚えている。

小さな社会である「学校」という空間で、極々普通に、自然とこの様なやり取りができることに驚き、また嬉しい気持ちでいっぱいになった。今思えば、多文化共生という言葉もまだ余り耳にしないその頃、既に子どもたちは、いや、この町の人々の暮らしの中には、支え合う人の姿や寄り添う文化の存在があった。時には傷つけあうこともあっただろうが、暮らしの中で培ってきた異文化との共存は地域の財産だと思う。

この地域の学校に民族学級が設置されてから60年。みんぞく教室に通う児童が4世、5世となった今、民族との出会いが良いものであってほしいと、心から願う。そんなお手伝いをこれからもしていきたい。

(金 慶子 京都市立凌風学園コリアみんぞく教室講師)

〈シリーズ〉登録団体との連携・紹介 (12)

京都・東九条CANフォーラム

京都・東九条CANフォーラムは、「多文化共生のまちづくり」をめざし、2009年5月に設立されました。CANのCはCommunity（コミュニティ）、AはAction（アクション）、NはNetwork（ネットワーク）の頭文字を取り、全体としてCAN（キャン）「～が出来る」という意味が込められています。

これまで月例会の他、シンポジウムや公開学習会、コンサートやワークショップなどを開催してきました。また、東九条マダンや東九条春まつり・夏まつりのイベントでは、毎回すじ肉串焼きの出店を出しています。以下は、設立趣旨文の一部です。

*

東九条は京都市の中で最も多く在日外国人が居住する地域です。戦前から戦後にかけて、この地域では民族差別や貧困にあえぐさまざまな境遇の人々が肩を寄せ合い生きてきました。1960年代以後、廃品回収に従事する人々の集落は度重なる大火災により、着の身着のままに焼け出され、人が焼け死に、深刻な社会問題として京都市民が認識するに至り（中略）あれから約40年余の歳月を経て人口は減少し、まちに活気が失われつつあります。この間、住民運動と京都市の協力により一部住環境等で一定の成果を上げたものの、それは東九条の抱える問題の一部にしか過ぎません。（中略）今こそ東九条を「多文化共生が息づくまち」として再生する必要があります。私たちはもう一度、東九条の歴史や現状から根本的に問題を見直し、住民・市民運動と行政が共に手を携え、未来に希望の持てる「多文化共生のまちづくり！」をめざし、ここに「京都・東九条CANフォーラム」を結成します。

（朴 実 京都・東九条CANフォーラム）



京都・東九条CANフォーラムの設立総会（2009年5月）より

〈サロン利用者の声〉

年末のもちつき大会

毎年12月半ばになると、ネットワークサロンでは、威勢のいい「もちつき大会」の音が響き渡ります。東九条改善対策委員会が主催し、昨年で32回目となりました。6斗(=60升)を、約50回に分けてつく大変な量ですが、子どもも大人もたくさんの方が集まってにぎやかになっています。最近では、外国から観光に来た人たちが参加される姿が見られるようになってきました。日本のもちつきが珍しいのでしょうか、みなさん楽しそうに参加されます。



ついた餅は、きなこ餅、大根餅、ぜんざいにさせていただきます。どれも一皿100円。つきたての餅は、あまりのおいしさに大人気。「やっぱりつきたての餅はおいしいなあ！」去年から、袋入り白餅も100円で持ち帰りできるようになりました。

お腹もいっぱいになったお昼には、参加者全員で「ビンゴゲーム」を楽しみます。

こうして、年末にもちつきを楽しみながら1年を振り返りますが、2013年には、もちつき大会のひと月前、フィリピンを超大台風が襲い、多くの人々の命や住まいを奪いました。集まった人たちに、在日フィリピン人グループ「パグアサ」のみなさんが歌を披露しながら、被害者への支援を呼び掛けられたことは、今でも記憶に焼き付いています。

寒い年末に、つながりの温かさやうれしさを感じる時でした。

(叶 信治 希望の家カトリック保育園)



〈サロンへのメッセージ〉

地域社会と共生関係 ～ネットワークサロンの普遍性～



旧・京都朝鮮第一初級学校の跡地

京都市地域・多文化交流ネットワークサロンがオープンしてから4年が経とうとしています。私は、サロン事業が始まった当初、職員として働かせて頂き、多くを学びました。「地域・多文化」と銘打っているサロンのユニークさは、地域社会の中で多文化共生の意味を問いながら、真の共生関係を築いていく拠点たらんとすることにあると思います。

一方で、2009年12月、サロンが位置する東九条地域と深い関わりのある京都

朝鮮第一初級学校が襲撃された事件は、戦後70年近く、脈々と培われてきた地域での共生関係を破壊する衝撃的な出来事でした。襲撃を人種差別と認定し、民族教育を評価する司法判断が最高裁で確定しましたが、地域における共生関係は今なお傷つけられ放置されたままです。

「不法占拠」していると批判を浴びた公園をめぐる様々な記憶、エピソード、関係性が、地域の中に豊かに育まれ、確かに存在してきました。学校が醍醐地域に移転することでその記憶すら薄れつつあることに危機感を感じています。

在日コリアンが集住し、多文化共生の拠点であろうとする地域においても、いや、そのような地域であるからこそ、共生関係とは、薄氷を踏むような、絶え間ない繊細で地道な取組みの中で培われていくものであり、また、それは一瞬にして吹き飛ばされかねないのだと痛感させられました。だからこそ、啓発型・交流型の取組みでは必ずしも手の届かない、日常に働きかけ、地域の中に脈々と共生関係を息づかせ、根付かせる作業が重要になってきます。

まさに、そのような地べたの〈多文化共生〉は、日常の生活課題・地域課題の解決の積み重ねの上に成り立っています。そのことへの敬意と信頼があるからこそ、ネットワークサロンは東九条地域流の発展を遂げながら、近年、多文化化が著しい醍醐地域に見られるように、徐々に、広がりをも示し始めているのではないのでしょうか。

(山本 崇記 静岡大学人文社会科学部准教授)

- 所在地: 〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町 31 (京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内)
- TEL: 075-671-0108 FAX: 075-691-7471 E-Mail: salon_kyoto@ck9.so-net.ne.jp
- 開館時間: 9時～17時 WEB サイト: http://www016.upp.so-net.ne.jp/k_salon/
- JR 京都駅・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅 徒歩 15 分
京都市バス 42・202・207・208 系統 九条河原町下車 徒歩 10 分